

喜河江高等学校創立五十年

創立五十周年記念誌



長瀬創立五十年



## 伝 統

剣道部元顧問 斎藤 学先生

昭和四十五年三月三十日、私は、県立寒河江高等学校剣道場の床に立っていた。

大学を卒業して間もなく、初任校となつた寒河江高校からの呼び出しに従い来校していたのである。「ここで私の教員生活、監督生活が始まる。」のだと言う緊張感と決心とで身の引き締まる思いをしたことが今でも思い出される。

当時、寒河江高校は四十四年まで寺崎芳雄先生を擁し、全国大会に幾度となく駒を進めていた高校であり、その実績の偉大さに責任を感じ、自分の置かれている立場の重大さにとてつもない不安感を覚えたものであつた。しかし、そのような不安・心配等を取り除いてくださつた諸先輩が次の先生方であり、当時を振り返り思い出を記したいと思う。

寺崎 芳雄先生（前顧問）

創部者の大川庸介先生、大沼正宏先生、山上一郎先生、菅野一郎先生、荒木重雄先生、國井董先生、細矢藤悦先生等と、寒中・寒高剣道部を戦前・戦後共に支え、育てて来られた先生である。そして私の大学の先輩でもありましたので、後任者の私に対して心温まる御助言があつたればこそと感謝申し上げます。

自チームの編成に生かさせてもらつております。また、東北ミニ国体・弘前大会の時、山形県代表の選手として宇野立先生と共に寒高関係者として出場したこと、その翌日岩木山に初めて登山したこと忘れられません。ありがとうございました。

その他、須藤英太郎氏、白田進氏、近松捷一氏、佐藤幸司氏、

安食睦氏、安孫子仁氏、中村紀久雄氏、宇野立氏、鈴木勝治氏、菊地睦雄氏、佐藤勤一氏、佐藤賢二氏、仁藤雅夫氏、五十嵐義一氏、清野正博氏、井場仁氏、村山則雄氏、大沼寛氏、神尾裕一郎氏、他記載漏れしました方々等、在職時並々ならぬ御指導・御鞭撻に感謝し、伝統を少しは受け継がせていたことを誇りに思います。

以上、諸先生方の思い出を書かせて戴きましたが、他界された先輩のご冥福を祈り、現役で活躍されておられる諸先輩の一層のご健勝を祈念し感謝申し上げます。

清野 正彦氏（元OB会会長）

四七インターハイ準優勝、四八インターハイ優勝時の市内パレード準備、コース、スタート地（駅前）、到着地（市役所）の決定、乗車する車の手配等、会長として手際よく指示されている姿に唯々感心した次第です。そして良く酒会にもお誘いいただきました。また、特に大会敗退後の酒会では、勇気と新たな元気を与えて下さいました。懐かしく思います。

宇佐美 利一氏（元OB会副会長）

御子息（伸治君）をお預かりする以前から、何かと御指導いたしました。特に遠征費の捻出の上手さには敬服させられるばかりでした。年間百万円（今のお金に換算すると七百万円くらい）の強化費（選手派遣費・遠征費）を清野会長とお二人で、寒高同窓生の企業・老舗等からの集金力に驚きましたし、助けていただいたこと忘れられません。また、勤務先が丸魚と言うこともあり、特上のトロ（四切れ以上食べると下痢する程油が乗っていた）の差し入れで部員と共に喜び、稽古に一層気合が入つたこと忘れられません。

OB・S氏

寺崎先生御退職後の寒高剣道部を心配され、私の片腕（先輩なのに失礼であるが）として毎日の稽古、定期合宿、遠征の同行等、一緒に指導できましたこと本当に幸福でした。特に、大会の選手・オーダー等の決定にも重要な御助言を戴きました。それが今でも

▼昭和48年8月 女子剣道部全国制覇



〔昭和四十六年度『暁鳴』なし〕

## II インターハイ特集 II (昭和四十七年度)

### 実力発揮した剣道部

感 激 (昭和四十七年度)

太 田 千 代

「インターハイ」という言葉を初めて耳にしたのは中学三年の時でした。その言葉を口にすることもなかつた私が剣道を始め、インターハイに出場できるなんて夢にも思つていなかつた。

準優勝というすばらしい栄冠を勝ち取つた先輩たち。あの前年度優勝の鹿児島との決勝戦は忘れられない。一対一のまま代表決定戦に持ち込み、延長七回という大会始まつてまれに見る激戦。

齊藤学先生と私たち二年生三人は正座し、一秒一秒を見守りながら二十分という長い時間を経過した。手に汗握る戦いが終わつたあの一瞬。先輩たちは・・先生は・・私の心にジーンと響くもの

があつた。最後の「礼」のため、先輩達と同時に整列するとき、気を取りもどしやつとのことで立ちあがつたのです。先輩達は涙すら見せなつた。精一杯やつたという満足した表情でした。先生の前に行き、「どうもありがとうございました。」と言つた時、「よくやつた。」とおつしやつてうなずいていた先生の目は、涙でいっぱいであつた。そんな先生の顔は今まで見たことがなかつた。「今度はおまえらの番だぞ。」という先生の声が聞こえた。自分で何度も言い聞かせた。そして鹿児島高の人達と、お互いに手をついて心から礼をした。この心の交流があつてこそ、インターハイの価値があるのでないでしようか。私は、鹿児島高の二年生と「来年、きっと三重で会おう。」と言い合つた。私は、先輩たちが言つていた「三人だからこそ、ここまでやれたのだ。一人では、とてもここまでやれなかつた。」という言葉を忘れることができない。インターハイ準優勝に至るまで、何度もなく合宿もやり、遠征にも行き、いろんな学校と試合もやつたし、全国にもたくさんのお友を持つことができた。

このような素晴らしい体験をこれから高校生活に生かし、悔いのないよう頑張つていきたいと思う。

### 《出場戦績結果》

◇女子団体予選リーグ ◇

### ▽一回戦

寒河江 三一〇 滋賀八幡商

### ▽決 勝

細谷コ 一 古蔭山

### ▽二回戦

寒河江 三一〇 広島東城

### ▽決 勝

阿部ド 一 古久米村

### ▽二回戦

寒河江 二一 一 鹿児島

### ▽決 勝

白田 一 古浜田〇

### ▽二回戦

細谷コ 一 長崎県立

### ▽決 勝

細谷メ 一 亀沢

### ▽二回戦

細谷コ 一 メ久米村 (延長七回)

### 特別寄稿

私の可憐な分身達

寒高生でもやれる!

齊 藤 學

これは、私が生まれて初めて書いた寄稿文です。今年、寒河江市で行われた全国高校総体剣道大会において準優勝を獲得したのをきっかけに、どうして寒高剣道部が全国第二位になつたか、監督としてのわたしがどのようにやつて来たかをまとめたものです。

いまでもわたしたちの練習ぶり、活躍ぶりはいろいろと断片的には知られていましたが、そうした一面的なことではなく、わたしと選手が貫いてきた精神を、この会誌を通じて語りたかったのです。そして、"寒高生でもやれるんだ"ということを自覚して欲しいんです。

## 一、全国大会準優勝いまここに

### (二)すべてをかけたあの一本

#### 決勝、代表者戦

延長七回目、残り時間十五秒、代表者、大将細谷選手得意の余し面。しかし審判の旗は、白三本。鹿児島高代表者、先鋒久米村のメンメーンの二本目のメンが決まつて試合終了。一対一、一引分け、代表者戦一対〇、主審の合図とともに、選手たちはさつと開始戦に整列しました。

負けた！

頭がガンガン鳴り、目がかすみ、あたりはぼうとしてわたしは何も見えなくなりました。その時、応援席の人々、そして全国からみえた審判、ならびに役員の人達は、両校選手におしみない拍手を送っていました。しかし、選手達は、涙も流さず、最後の挨拶をかわしていました。そして挨拶が終わるやいなや、選手達は私のそばに飛んで来ました。私は両手をいっぱいに広げ、選手一人一人の肩をかかえて言いました。「良くやつた！ 良くやつた！ 今までにない最高の試合だつたぞ。」選手達もうなずいていました。彼女達も充分満足のいく試合だつたのでしょうか。

そして、補欠の二年生三人と、計六人は、そろつて正座し、「先生、ありがとうございました。」と言つてくれたのです。私のほうが、かえつて「ありがとうございます。」と言いたい気持ちでいっぱいだつたので、私も正座し深々と頭を下げていました。こんな時は、自分を見失いがちなのが普通の人間。しかし私の可憐な分身達は、ためにやらなければいけない、いわゆる三無主義であつてはいけないということです。

#### 必要なのは人がやる以上の努力だ。

ある人が、中学を卒業して高校に進学したとしましよう。この人が中学生のあいだは、だれも勉強を強制することができないはずです。自分の意思で中学に入ったのではなく、義務教育だからです。しかし高校は、ちがうと思います。学校は、この人がその学校の方針に従うことを承知して、自由意志で入学したものとし、その方針に従うことを強制できると思います。この人が、強制によって学校のため、しかたなくやつたり、あるいは、それすらもせず、単に時間つぶしに授業に出るだけだとしたら、これは自指す大学にも進学できないし、社会に出ても、この人でなければ、という存在にはなれないでしょう。自由意志で勉学の道を選んだのですから、それに打ちこむべきです。なにごとも自分のためだと思って、勉強もクラブ活動もやることです。自分自身のため、人のやる以上のことを命がけでやる。それがいい結果を生

このような興奮時にも、しっかりと礼節をわきまえていたのです。そしてあれだけの苦しい練習をして来たにもかかわらず、「先生、ありがとうございます。」の言葉は、私と選手達のあいだに、絶対の信頼感があつたからだと思います。

#### 涙の中の開放感

閉会式終了後、男子部員たちも一緒に私を囲みました。「センセイ、ありがとうございます。」「センセイ、おめでとう。」口々にそう言うなり、私を胴上げし始めました。二回、三回、四回、……。陵東中体育館が、ぐるつ、ぐるつと回転しました。部員達が突き上げる一突きごとに、酔つて陶然と外界に遊ぶように、身も心もほぐれて行く思いでした。

(二)私の信念、"やればやれるんだ"すべて自分自身のために。私は、生きるとは勝ち抜くことだと思つています。そして、勝ち抜くことが不可能なようと思える場合でも、やればできるのです。それを、私達寒高剣道部は、身をもつて示してくれたと思います。

たとえば、主将の細谷とく選手。この選手は寒高にいるごく普通の女子高校生から、今日、全国第二位になるまで三年間というもの毎日ただ黙々と練習をかさね、一日一日、目に見えない進歩を続けてきました。この長い年月の間、剣道の技術だけでなく、人間としての内容も充実し、この人のいうことなら部員全體が從

みます。

何をするにも、他にぬきんぐには、自ら進んでやり、どんな厚い壁も突き破る意思と努力なくしては、達せられません。それには、ほとんど例外はないと思います。だから自分自身のためにやるのでなければ、他人のためにでは、成しとげられないのです。

私は、選手達に、県の方針だからとか、県剣道連盟がそう言うから、と言つた気持ちになるな。といつも言つてきました。自分

自身のために日本一になるのだ。と。

こうして寒高剣道部が、"やればやれるんだ。"の精神で日本第二位になりました、その出発点は、"自分のため！"でした。

#### 二、日本一へのチームづくり

##### (一)県内のタイトルを総ざらい！

やるからには絶対負けるな！

先に、細谷選手についてのべたが、他の二人も、細谷選手同様、寒高における何ら変つたところのない一般的な女子高校生として、三年前の四十五年四月剣道部に入部して来ました。「霜ふんで堅氷いたる。」といいますが、ものごとはすべて一気になるものではありません。全国大会で勝つには、まず山形県一になろう。私はそう決心しましてチームの育成に全力をあげてあたりました。今日、よくもまあ、と諸先輩もあきれることが、その時入部してきた選手たちは、身体も小さく、中学時代は剣道の"ケ"の字も知らない、名もない乙女ばかりでした。阿部、白田はむろ

のこと、細谷主将にしろ、自分達が、やがて全国第二位にならうなどとは、夢にも思つていなかつたはずです。

かくいう私自身、中学時代に県一位と二位、高校時代は県二位。

日体大時代は、せいぜい東教大、國士館大、慶大などとの定期戦の選手として出場したくらいの、まったく無名に等しい経験でした。

この無名の者同志、まずは県一になることを目標に出発しました。

以来、約三年間、私達は春夏秋冬の遊びもなければ、日曜、祭日も盆もほとんどないくらい、来る日も来る日もただいちず練習につぐ練習でした。

そして、二年目の夏の国体県予選から、村山地区新人、山形市長杯前期大会、県新人、山形市長杯後期大会、三年目村山地区大会、県高校総体のすべてに優勝し、完全に山形県一になつたのです。しかし、それに到るまでの一年目は、色々な苦い思い出のある試合をくりかえしました。村山地区一年生大会で勝つたものの、県一年生大会では二位、県新人戦においては予選リーグ敗退、とさんざんな成績でした。しかし、個人戦において阿部選手が、村山地区と県一年生大会を連取し、県新人も第二位でした。

『先んずれば人を制す。』のことわざどおり、三年生が京都での全国大会後引退し、一年先輩が一人もおらず、阿部、白田、細

りたつたけれども、試合においてあと一步というところで勝てないところから、効果らしい効果が上がつていないと気づきました。反省した結果、私はきびしくやつてゐるつもりでも、やはり相手が女子であることを意識していたことに気づきました。——女だから、とかげんしてやつていたのでは、とてもたいしたものにはなれない。男がやるような練習をやつて、はじめて他の女子チームを圧するようになるのだ。——そう気づいた時から、練習するときだけは、女子とかなんとか考えないことにしました。選手達もそれに慣れてきました。不思議でも何でもないことでしょうが、練習を厳しくすればするほど、選手達は、気がまえも体力も強くなつていくのを見て、私は非常に不思議な気がしました。ですから、私は自分のやり方を、私と一緒にいる選手達に押し付けます。つまり選手達は、私の分身になつて行つたのです。しかし、私のやり方、それが世間のだれにも通じることだと、通じさせべきだとも思いません。だが、こんな人間もあつていいし、こうでないと生きられない人間もあるのだと思います。

ケガに慣れてしまえ！

ものごとはすべて、おそるおそるやつたら失敗します。勝負なら負けです。二人相対したとき、相手の目を見る。心中に恐れがあれば、相手の目を見ることができません。最初から負けです。  
——ケガを恐れるより、ケガに慣れてしまえ——これが、あえてとつた私のきびしい練習の道でした。

谷の各選手が、一年生の夏からメンバーを組めたことは、試合経験と言う意味から本当に幸福だった。

## (二) 猛練習

向こうが一時間ならこちらは四時間。

昨年、四七年インター・ハイ徳島大会へ、男子個人戦出場の黒田選手に同行した際、女子団体優勝の鹿児島高校の試合を見学出来た。鹿高（今年も勝ち、二連勝）は、メンバーが二年生二人、一年生一人という布陣だったのです。そして、来年の強敵は、この高校だと、ねらいをさだめ、鹿高の監督に、練習について色々と聞き出してきました。その時、鹿高の練習時間が二時間ということだったのです。よし、それでは、寒高的練習時間は四時間だと決心して帰つてきました。しかし、四時間も続けての剣道は、とてもやれるものではありません。そこで、一時間朝稽古に回したのです。ましてや鹿高の選手は、インター・ハイで優勝する以前、中学時代全国のチャンピオンになつていたのです。その時の寒高剣道部は、県大会第二位でしたから、それに対抗するには、練習回数＝面をつける回数を倍にすることだったのです。

かくして、本格的な、つらく、苦しい朝稽古が始まつたのです。

## 練習に男女差は無用

一年生が入部して来た当初、毎月のスケジュールをつくり、選手達に基礎から教えこむ努力をして來ました。そして、半年ばかりたかわからせん。他の選手も同様だつたのですが、その時、白田選手は、ハメ板と柱に全身を打つて、一瞬起き上がり難くなりました。しかし、まもなく“ナニクソ”と打ち込んで來ました。練習後、肘が痛いというので病院へ行かせました。ケガはひどく全治二週間。一週間は運動禁止と言られて來たのです。さつそく病院の先生へ電話したところ、関節、骨にはぜんぜん異状はないが、全治二週間はそのとおりでした。そこで、白田選手を呼んで言いました。「痛いと思つたら二週間剣道は出来まい。しかし、やろうという気があればいつからでもできる。」と言いましたところ、ケガの翌日から、肘が固定してあるので他の人に面をつけてもらい、片手で練習を始めたのです。

四日目からは、他の選手と普通に練習を始めていました。その時、私が女子だからとか可愛そだからとか、考えて練習させなつたら、今日の四十七年度県個人戦チャンピオン——白田選手はなかつたことでしょう。医者に確かめ、特に異状がない時は、「痛いと思つたらだめになる。負けちゃだめだ。ナニクソと思つたら病気は治る。」と他の選手がケガした時もいつもそのように言つて來ました。それらはすべて栄冠の前の苦痛だつたのです。

苦しみはまず自づら！

私は、自分のことを語つて誇るつもりはありません。誇るべき

ことでもありません。けれども、選手だけに無理をしたのではないことだけは知つて欲しいと思います。私は、自分がこれだけやつているのだから他人にも、と強要することはまちがつていると思います。しかし、他人に要求するからには、まず自分がそれ以上のことをし、それ以上の苦しみに耐えねばならないと思いません。朝七時半からの朝練習のときは、私はできるだけ自宅から通勤するようにしました。選手達が他のクラスメートより、一時間も早く学校に来るので、私が官舎に泊まり、七時起床で七時半から練習するなどということは自分自身が許さなかつたのです。自宅から通勤すると、朝は四時半に起きねばなりません。また、放課後の練習を六時半までやると、家につくのが夜半の十時なのです。こうして通勤しているとつらくなる時もありました。しかし、そんな時、「選手は、勉強しクラブでしばられ自分以上につらいのだ。」と自分自身に言い聞かせました。よく独身だからやれるのだ、と言われる時があるので、今後とも、阿部、白田、細谷、そして現在の二年生のような、私の分身達がいるかぎり、将来、結婚するようなことがあつても、自分が世間なみの夫になつたり、父親になつたりすることは、わたし自身けつして許さないことでしよう。

### 三、可憐な分身達！

#### (一) まさに偉大なる平凡

小学校からやつていたのか、

のだ。」と自分自身に言い聞かせました。よく独身だからやれる

のだ、と言われる時があるので、今後とも、阿部、白田、細

谷、そして現在の二年生のような、私の分身達がいるかぎり、将来、結婚するようなことがあつても、自分が世間なみの夫になつたり、父親になつたりすることは、わたし自身けつして許さないことでしよう。

### 剣道のアイドル 中堅 白田喜久子

身長一米五六 体重Yキロ

彼女の足さばきは、早くから県内一の折紙がつきました。関東遠征でも、練習した相手校の先生から必ず足さばきはほめられるのです。インター・ハイにて、わが県の女子ではじめての優秀選手賞を獲得した最大の要素は、この足さばきにあつたのです。

### 四、寒高生でもやれる。

平凡な三人の寒高女生徒が、全国第二位になつたのです。寒高生でもやれると言いましたが、実際は寒高生だからやれたのかもしれません。その栄光を勝ち得るまでには、先に記したとおりの、つらく、きびしく、苦しい三年間でしたがやり得たのです。それは、自分の気持ちをまとめ、そのことに命をかけるだけの気迫をもつて、挑戦していったからです。寒高生の諸君！君だつてやれる。今からでもおそくな。今、自分は何をすべきか考え、一日をつくそうじゃないか。

### 頼りになる主将、大将 細谷とく

身長一米五五 体重Zキロ

この選手は、インター・ハイ決勝、代表者戦で敗れるまで、チ

### 不器用の天才、先鋒 阿部味佐子

身長一米五六 体重Xキロ

この選手は、先にも書いたとおり、一年時、剣道を始めて五ヶ月で、県新人個人の部にて準優勝したのです。五ヶ月でこのような成績を納めた原因は、ただファイトをむき出しにして、相手に打込んでいったからです。またこの選手は、バレーボールをさせても、バスケットボールをさせて何をさせても、剣道以外の運動はまったく不器用なのです。しかし、長距離走だけはちがつていました。校内マラソン大会でも、三年間一ヶタ入賞をはたしているのですから。それが、剣道には良かつたのかも知れません。

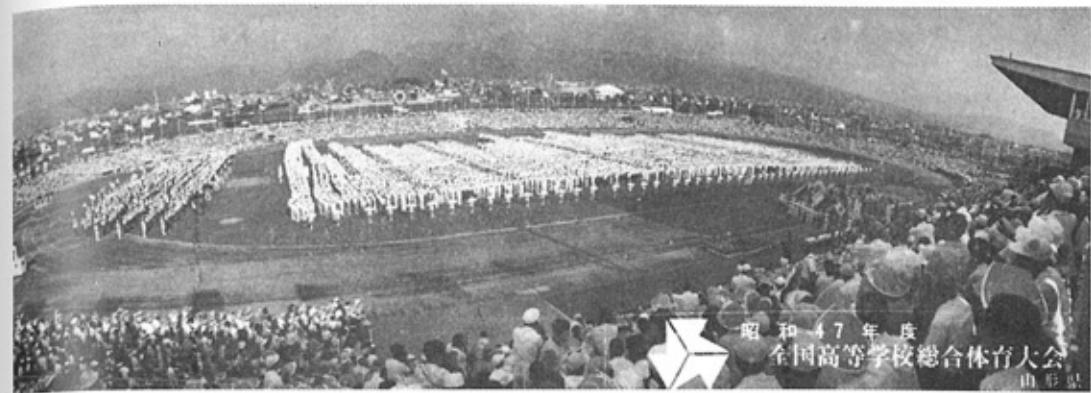
ムの勝敗を決める大将戦・代表者戦では、ほとんど負けることを知らない選手だつたのです。でも、先鋒、中堅、二人が勝ち、チームの勝利が決まるとき、負けなくともよい相手に日々敗れることがありました。二年生時、県新人個人戦に優勝し、女子でただ一人の県強化指定選手に選ばれました。しかし、彼女にも悩みがあつたのです。太る体质、それは体型が女性らしくなることなのです。が。その体质をも、冬期間毎日二～三キロのランニングで克服しました。県高校総体決勝リーグ第三戦、一対一の大将戦も、応じ返し胴、そして得意の諸手半面で、一分とかからず二一〇で勝ち、全国大会への出場権を獲得したのです。そして、インター・ハイでは、剣道大会開会式の選手宣誓者に選ばれ、その大責も立派にはたしました。



真剣な眼差しで試合を見守る寒女子チーム



力強く選手宣誓する細谷主将



昭和47年度  
全国高等学校総合体育大会  
山形県



見事、準優勝を勝ち得た女子剣道チーム、後列左より、斎藤(学)先生  
山田校長、細谷先生(現米沢興譲館教頭)、那須先生 前列左より、  
渡辺、阿部、細谷、白田、太田、竹屋、の各選手//



ドウ~(ドウだ、思い知ったか)



メンメーン(カッコイイ)//



8月2～6日全日本大河内市立場  
昭和47年度全国高校総合体育大会 迎  
1972年全日本高等学校剣道大会 東河江原村山実行委員会

## 先輩に続け！（昭和四十七年度）

『準優勝』インターハイ女子団体の部、この栄光は今年度の私たちの活動を述べるにあたり冒頭に掲げるべき最大の栄光です。

五月七日

村山地区大会において女子団体優勝

五月二十七日

インターハイ県予選会が陵東中学校において行われ、女子は圧倒的強さを示し堂々優勝。男子は無念の涙をのむ。

この大会でインターハイへの出場権を得たわが校は県外遠征、強化合宿と着実にインターハイ入賞を目指す。毎日の苦しみの連続で自らを責め、大会を待つ先輩達。

八月二日

ついにその日來たり。わが校は予選リーグから順調に駒を進め、決勝トーナメントも確実に勝ち進んだ。準決勝で脇町高校を破り、決勝戦、相手校は前年度優勝校の鹿児島高校である。

一対〇からの大将戦、細谷さんが残り時間数秒のところで飛び出場、私たちが息を止め見守る中で延長戦が開始されたが、双方技量が切迫しているため勝負がつかず、再度延長すること七回、八回目ついに「面」をとられて鹿児島高の優勝が決まった。しかし、先輩たちはほんとうによくやつてくれた。

男子団体 二位

というようになる。

部員難などの問題はあるがこれからは男子、女子共に県大会制覇を目指し、寒高剣道部の伝統を守るべく稽古をつみたいと思う。

（渡辺 淳）

## ＝インターハイ特集＝（昭和四十八年度）

寒高生ならやれる！  
女子剣道 優勝!!

自分がだけがつらいんじゃない

今年、念願の『インターハイ優勝』を達成し、クラブ活動の意義を知り、そして、感激を胸にした一年間でしたが、それまでの道のりは、短い期間ではありました。私たちには、とても長く思えました。昨年、おしくも、決勝で涙をのみ、『負』というものを、強く感じた私たちは、ただ、先生と、クラブ員が、一丸となつて、練習をやるのみだったと思います。

朝は、ダッシュをしたり、稽古したり、冬になると、ランニングなどもやりました。午後は、六時半ぐらいまででした。

また、寒高卒業の先輩方が、よく来てくださって、御指導をう

先輩たちが成し得たこの偉業は、寒河江高剣道部の伝統の中に輝かしい一ページを残してくださったことであり、今後、私たち後輩が目標とすべき最高峰を作ってくれたことであると思う。だから私たちも先輩に続かんと連日稽古をつんでいる。

さて、三年生の先輩たちが去つてからの戦績をふりかえると、

八月二十日

▽山形県剣道大会

男子団体 三位

八月二十二日

▽村山地区新人

男子団体 三位

▽国体予選会

行わる。夏休み返上の毎日の稽古、先日の大会での入賞などで、勝気で試合に臨んだのであつたが、男女とも

準々決勝で破れ、皆大いに残念がつた。

十月一日

▽山形県横山旗争奪剣道大会

女子団体 優勝

▽福島県横山旗争奪剣道大会

女子団体 優勝

十月十二日

▽山形県剣道大会

女子団体 優勝

十月十九日

▽山形地区剣道大会

けてきました。先輩方のバツクアップが、私たちをここまで成長させてくれたのでしょう。

その他、他校試合、合宿、県外遠征を重ねました。他校試合では、招待して、いつしょに試合、練習して、技をみがきあい、合宿では、クラブの「和」と、体調整を目標として、試合に臨むようにしました。県外遠征では、宮城、秋田、岩手、福島、千葉、群馬、山梨、東京、福岡など数多く重ね、いろいろな剣道をみて、それに対する自分の剣道をみつけ、どんな剣道に対しても、臨めるようにと、練習してきました。

これらの練習の中で、私たちは「自分がだけがつらいんじゃない。相手もつらいんだ。」ということを、いつも考えてきました。練習は確かにつらく、泣き泣きしたこともありましたが、このことを胸にして、やつきました。

でも、いつもが、つらいばかりのクラブ活動ではありません。時には、クラブを忘れ、みんなで笑い、さわいで楽しんだこともあります。

このような『インターハイ優勝』を目標とした練習で、私たちには、精一杯自分の力を出し切り、試合に臨んだのです。

試合経過

八月二日から三日間、三重県尾鷲市で行われた全国大会。大きな体育館も、熱気と興奮のうずでみなぎり、私たちの気持ちは、いつも勝負への決意を強くしました。

予選リーグ。宮崎県代表の高千穂高、愛媛県代表の松山商高と対戦。両戦とも、試合時間四分という中で、私たちは一秒一秒見守り、手に汗握りながら先生のわきに正座していました。それぞれ、二対〇、二対一と勝ち、ブロックを出て、決勝トーナメントへと進みました。

トーナメント一回戦、岡山県代表の作陽高、二対一で勝つことができたがハラハラのしどうでした。大将戦となり、時間もせまり、一秒を争う試合になりました。二回戦は、大分県代表の野津高。野津高は、私たちがマークしていた高校の一つでした。この試合も大将戦となり、二対一で、敗ることができたのです。

ここまでで、その日の試合は終わりでした。旅館に帰つてから、明日戦う宿敵鹿児島高校戦に備えて、練習。夜のミィーティングでは、みんなで、明日の試合への意を堅めました。

そして、むかえた準決勝戦。火花が散り、闘志を燃やしていたのは鹿児島高も同じだったでしょう。

先生に肩をたたかれ、出でいつた先鋒の渡辺。審判の「始め」の声で、試合が始まった。気持ちをまとめ、慎重に進めていった。時間ぎりぎり、一瞬のうちに、小手を取られ、時間切れになってしまった。次、中堅の竹屋は、初め胴を取られたがみごとなフットワークからの飛び面を決め、引き分けにしてくれた。本数二対一で、大将の太田。二対〇で勝たなければ、勝つことができない。このことが、脳裏を走り、不安で、いても立つてもいられなくなり、いつのまにか、涙が頬を伝わっていました。そんな中で、小豆でこぼここぼこでしたので、対戦相手がとまどつてしまつたのだと思います。

山にかこまれた寒河江から海の見える三重へ行き、しかも伊勢神宮を参拝できただったことが、大変うれしく思いました。多くの人々から応援していただいた、わたしたちは幸せです。

### 中堅 竹屋 郁子

大将 太田 千代

中学生の頃、私は、グランドで動き回つてゐる友達をうらめしげにながめていた。そんなこともあつて欲求不満の解消、エネルギーの発散場所として寒河江高校を選んだ。もちろんスポーツに賭けてみようという意欲もなかつたし、クラブ活動というものを甘く考えていた自分だった。その私が今こうして剣道全国一位のチームの一員になつたのだ。全く私にとつて画期的な大事件であつた。

今、思い出すことといえば、大会前日までの、毎日毎日の練習と、その後とつても喜んでくださつたみなさんの顔だ。

「ペーブルースのような天才でない我々純才は、毎日の過程が大切なんだ。」齊藤監督のきつい言葉の中でのきつい練習の間、もうだめだと限界を感じて、何度もくじけそうになりながらも、い

手を決め最後に面が決まつたときは、どうしようもなく、体が熱くなり、ボオーとしていました。うれしさがこみあげてくると同時に、「ここまで来たら……」という意識も高まつてきました。決勝は、茨城県代表の日立第一高でした。気持ちが高ぶつたままむかえ、先鋒が胴・小手を取り、中堅が小手・面を取り優勝が決まり、最後の大将の試合をみんな見守つていました。

最後の礼を終え、みんな集まり、喜びをかみしめました。「よくやつた。」という先生、先輩の目もうるんでいました。

### 交 剣 知 愛

先鋒 渡辺 裕美子

一六六・一五〇・一五九センチ、どこの県にも見られなかつた、でこぼこチームでした。

先鋒—先生から「おまえの剣道はいつもどたばたではないか。足さばきを小さくやれ。」と注意されるように、どんな技をやつても動作が大きく鈍い。そのかわり力だけは、ばか力というほどで竹刀をこわす数は三人の中で一番多いほどです。その力を利用して相手を吹つ飛ばしたり、体勢をくずして打つのが唯一の技です。

中堅—ネズミのようにちよろちよろ動作が速い。小さいのを生かしての小手打ちはすばらしいものです。

大将—調子の良いときと悪いときとの差が小さく、いつも安定とつても貴重な体験でした。

一つの間にかその限界を広げていたように思う。最後には、目標の一致した先生、部員の団結心が十倍にもふくれあがつたのだと思う。この感激を後輩のみなさんにも味わつてもらいたいと思う。

八月四日、私たちは一試合一試合を大事に克ち取つていこうと誓つた。一つとして楽な試合はなかつたがベストを尽くして頑張つた。そして打倒鹿児島に対する作戦を立てて猛練習。「先生、鹿児島に勝つ自信あるのですか。」「ある！」それならば……と思つた。

八月五日、準決勝—宿敵鹿児島と対戦。ただ頑張るのみだ。先鋒は延長にもち込み、おしくも一本取られてしまつた。

中堅は一本取られたが、飛び面で取り返し引き分け。そして私は年のかりを返してやるぞと思い、へまをやらないように慎重にやろうと言い聞かせた。二本目の面が決まつた。（勝つた！）三人で手を握りしめた。鹿児島の監督の先生が、丁寧に礼をして去つて行った。「まいりました」と言つてゐるかのよう。その時、かりを返したんだ。先輩やりました！と心の中で叫んだ。決勝—私たちは三人で一つなのだ。気をぬかずにやろう。先鋒・中堅が勝ち優勝は決まつた。（最後だな、よし！）……ところが、負

けてしまつた。ここで負けるとは、キャプテンとしてはずかしいことでした。

面を取り、正座してすぐ先生に「ありがとうございました」の一言・・・先生はただうなずくだけでした。今日に至るまでのことが、いろいろ思い出されてきました。剣道をやつて本当によかつたとつくづく思いました。

寒河江高等学校剣道部が一丸になつてやつたのです。そして、

みなさんの応援・協力があつたからこそ全国制覇できたのだと思ひます。本当にありがとうございました。

### 特別寄稿

## ありがとう



齊藤 学

”金メダル”。私は今、この寄稿文を「金メダル」と「銀メダル」を前にして書いています。昨年、銀メダルを得てし、今年は金メダル、銀より金のほうが素晴らしいのはありました。それが、それぞれに様々な思ひ出がうかんできます。同時に、「私は何と幸福な人間だろう」と思わずにはおれません。

私は、寒高赴任から四年間、寒河江高校を日本一にすべく生きてきました。そして、ついに日本一になつたのです。しかし、これは私達剣道部員だけが日本一になつたのではないと思うのです。全寒高生、長陵同窓会、PTA、そして職員とすべてが日本一を育てあげたのです。つまり、長陵に関する全ての人が日本一になつたのだと信じています。

## 一、わが愛する分身たちへ

私の指示することすべてを信じてついて来てくれた選手達。卒業を間近に私は、優勝できて本当に良かつたと思つてゐる。優勝した瞬間から一週間程は、君達が日本一になれたとはとても信じられなかつた。良く口ぐせのように「おまえたち、よく勝つたものだ」と言いましたが、今になつて実感がわいて來たようになります。私の如き未熟な指導者に、素直に従つて飛躍と前進を重ねた選手達。しかし、最終的に考えてみると、「各自が創り上げた精神力」に勝因があつたのですよ。

太田 千代 へ

「オッタコ!」「オオタ!」、私が太田を呼ぶ時、この二つの呼び方の使い分けはよく知つてゐるだろう。私は「オオタ、ありがとう」と、言いたい。主将として良くやつてくれたね。昨年度の全国大会は補欠だつたが、決勝で敗れた時から、一緒になつて今日の日を夢みて頑張つてくれた。「今年(四七年)の三年がうら

やましい」とはにかんでいたが、君はそれ以上うらやましがられる成果を収めたじやないか。優秀選手賞も獲得し、これからのインターハイ、プロには毎年名前が載るよ。

竹屋 郁子 へ

「イック!」「飛び面のイク!」よかつたナア。迷つたり、信じたりの繰り返しだつたけど、よくついて來たね。鹿児島戦での執念の「飛び面」、快心の一本だつた。今でも目に浮かぶよ。鹿児島戦に備えた前日の百本以上の特訓、実つてよかつたネ。その小さな身体でも日本一になれたのだ。これから、いくら小さな選手が入部しても「イク」のように頑張らせるよ。

後藤 智子 へ

「サトコ!」よく頑張つたネ。サトコには最敬礼だヨ。高松校舎から、一心不乱に三年間、よく通つたネ。他県の全国大会出場校におれば、レギュラーとして充分通用する剣道なのに、でも剣道を通じて得たものを、これから的人生に必ず生かして行く人間だと信じている。「サトコ」ありがとうございます。

渡辺 裕美子 へ

「ユミ!」「ドン!なユミ」「必殺抜き面のユミ!」、ありがとうございます。四十七年、十一月二十四日のことが思い出される。腰椎間板ヘルニアと貧血症のため、その日剣道を断念し、泣きながら私のところへ來たことが今でも忘れられないよ。私の「三月末の関東遠征まで復帰せよ。」絶対!身体はなおる。」という指示を信じ

私は、性格も違えば生い立ちも違う。教科も数学と体育、何もかも大



違の先生と私が、どうして呼吸もピッタリ、全国優勝をさせることができたか、私にもまだはつきりとわかりません。しかし、岩井先生も私も、選手たちを本当に愛していたのは確かです。

金メダルの日、八月五日は、本当に短かったです。朝、六時に起きてから、十二時の優勝までが、瞬時のような気がしました。試合場に入つてから私をリラックスさせるために肩をもんで頂いたことは今でも忘れません。先生は、剣道四段と高段なのに、技の指導に関して「ガクチャン！ガクチャンの信するようにやれ！」と常にそう言つて頂きました。私は、その言葉にどんなに元気づけられることでしよう。ワンマンの私に、何でも思う存分アドバイスしても頂き、励ましても頂きました。ユミのこともそうです。イクのこともそうです。そして補欠の問題にしても。日本一の協力者を持つた私は、本当に仕合せでした。これからもアドバイス、宜しくお願ひします。

#### 那須先生始め全職員へ

那須先生には、常に無理、難題ばかりお願いしてすみません。これからもそうなるかと思いますが、若輩の私でも宜しくお願ひします。選手たちの担任始め、各教科の先生方、陰に陽にご指導頂きありがとうございました。

岸教頭には、優勝祝賀パレード、そして祝賀会ありがとうございました。これからもいく度とお願ひしますから宜しく。最後になりましたが、堀口校長、応援ありがとうございました。

十月 秋田県立湯沢高校  
十一月 福島県立飯坂高校  
四八年三月 群馬県立勢多農林高校  
宮城県祇園寺高校  
山梨県甲府市立商業高校  
千葉県立佐倉東高校  
日本体育大学  
七月 埼玉県鴻巣高校  
九州玉龍旗大会見学  
福岡県久留米市立南筑高校

### “和”を求めて（昭和四十八年度）

今年は「インター・ハイ優勝」の念願が達成し、最大の栄光でした。これは、毎日の厳しい練習の結果であり、今年度の部活動を表しています。

宿敵鹿児島戦との準決勝。一対一、本数二対一と負けていたが、大将太田さんが、最後、みごとな面を決め、決勝に進むことができ、この栄冠を得たのです。

これで忘れてならないのは、先生と生徒が一致団結したことと、さらに、男子の人が大変協力してくれたことです。一年間、いろいろな目標をもつてやつてきましたが、一番大切なことは、

校長の応援は、選手のみならず私にとつても非常に心強いものでした。四十九年八月福岡インター・ハイも、ご一緒に下さるよう今からお願ひしております。

#### 男子剣道部と応援団へ

団員三名、酒井君、長谷川君、布川君、そして安孫子善一君、森前会長、インター・ハイ出発の日、玄関前での壮行会ありがとうございました。決意も新たに出発できました。

男子剣道部、渡辺君、菅井君、柴田君、安孫子英也君、安孫子隆君、ありがとうございます。君達は全国大会出場は出来なかつたが、魂は女子部員と共に出場していましたと、信じています。本当にありがとうございました。

最後に、私は、寒河江高校を日本一にするため、新しい分身達を創り出しながら、部員と一緒になり、これからも頑張っていく覚悟です。

#### （全国優勝に到るまでの県外遠征内訳）

四六年十月 秋田県立大館南高校  
四七年三月 秋田県立湯沢高校  
四七年三月 山梨県甲府市立商業高校  
千葉県立一宮商業高校  
日本体育大学  
六月 千葉県立佐倉東高校  
七月 福島県立四倉高校

部の団結だつたようです。心がひとつになつた時、初めて、みんなが納得のいく試合ができました。

おもな試合成績は、村山地区大会で、女子団体三位、女子個人で、竹屋さんが優勝、県大会では、団体、個人を、パーフェクトで圧したが、男子は、おそらくも入賞をいつした。しかし、悔いのない試合だつたと思う。

その他、西村山大会や、山形地区大会などで、男女とも、団体、個人で、入賞した。

三年生から受けついで後、県外遠征や、招待試合などを重ね、新人戦や、一年生大会では、優勝、二位、三位と入賞し、がんばっています。

今年は、部員が少ないためいろいろと悩んだりしましたが、サリーもクラブ員として入部し、毎日、練習に励んでいます。

## 女子剣道

### 自分の剣道を

和田清子

ある者は四十八年四月に、ある者は四十九年四月に入部して以来、あつという間に月日は過ぎました。毎日毎日放課後は、剣道を精一杯やるということで必死でした。

そしてあの日、八月三日がやつて來たのです。私達はこの試合に臨むにあたつて、九州の気候に慣れるために、七月二十三日に山形を立ち、福岡県久留米市に向かつたのでした。先生に、先輩にそして友達に励まされ、私達は口に出さずとも“優勝”ということを心の中で思つていました。

ところが予選リーグで、千葉県代表の木更津中央高に〇対三で負け、さらに岐阜県代表の八百津高に一対二で負けてしまい、優勝どころか、決勝トーナメントにも進めなかつたのです。一、二年生だから仕方ないと言えばそれまでだが、そんなことは負けた理由にならないと思うのです。理由にしようとは思わないのです。やはり実力の差なのでしょうか。ただ残念な事は、私達の周りの人々が、あんなに応援し、励ましてくれたのに御期待に沿ものが足りなかつたのです。また、精神面においても、欠けていたのだと思います。

インターハイに臨んで、九州の剣道に接することができたといふことが、唯一つ、私達には勉強になつたと思います。しかし、悪い結果をいつまでもくよくよして悔やんでいてはいけないと思います。今、私達部員は、来年へ向かつて、一歩一歩確実に歩んでいかなければならぬと思います。

### 転んでもただでは起きぬ

四十九年度インター・ハイは、無条件出場という光榮なインター・ハイ参加であつた。前年の四十八年度インター・ハイ優勝メンバーは全員卒業し、残つた選手は二年生三名、そして新入生六名という布陣での出場であつた。剣道を始めて、一年四ヶ月という経験の乏しい選手である。多くを望むのは、最初から無理難題であつた。そして、予選リーグ敗退。しかし、選手達は敗れても何かを掴んで来たと思つてゐる。それは、優勝した地元の久留米市立南筑高校との大会前の練習試合で、五分以上の試合をやつていたのだ。それなのに、片方は予選リーグで敗れ、片方は優勝。なぜ、そのような結果になつたのか。地元の利もあつたろうが、それ以前に、大会に臨む精神にあつたと思う。片方は不安と動搖で試合に臨み、片方は不安や動搖を乗り越えた気迫で試合に臨んでいたのである。それがわかつたということは、五十年度インター・ハイまでにその精神を気迫を身につければ勝てるこことを、暗示していると思う。この精神、気迫ほど難しいものはないが、先輩達が乗りこえたように、立派に成長してくれると信じてゐる。もとば

えなかつたことです。

どんなことがあつても試合をする時は、勝負力、集中力が必要なのです。難しいことかもしません。でもどうしても必要なのです。剣道の試合をするには、プロにならなくてはならないのです。それが試合に勝つという事なのです。

とにかく私達は今、来年のために必死で練習しています。稽古しています。剣道についての勉強もまだしなくてはならないと思つています。どんな人と試合をやつても自分の剣道というものができるようになりたいのです。今年はもう終わつたのです。あとはもう来年のために……。そういう気持ちでファイトを燃やしている剣道部です。

## インターハイに臨んで

後藤敬子

七月二十四日、私達剣道部員一同は、闘志と不安を胸に抱いて、インターハイ開催地福岡へと向かいました。

九州へ着いてからは、福岡県の南筑高等学校剣道部と一緒に練習をやつたり、また、玉竜旗大会を見学したり、九州の剣道とはどういうものなのかということを知ろうとしました。いよいよ八月四日、剣道大会の開催地久留米市において、大会が行われました。しかし、試合は一瞬にして終わつてしましました。リーグ戦敗退。まだまだ、私達にとって、剣道の勉強というトルまで。

つまり、これが第三期黄金時代の幕開けであると確信している。でに地区新人団体個人、県新人団体個人を取り戻してゐる。また、これからも奪回を続けなければならない。インター・ハイのタイトルまで。

## 第三期黄金時代を創る

齊藤 学

### 新しい出発

四十八年インター・ハイ優勝後の一年間というものは、寒高剣道部にとってまさしく、新しい生命誕生までの胎動であつたような気がする。思えば、四十四年、四十五年と連続インター・ハイ出場後の一周年間に似ている。というのは、四十五年度卒業生の次の学年が誰もおらず、残された選手は一年生だけであつた。よつて、四十五年インター・ハイ後は、二年間保持した県内のタイトルを全て失つてしまつた。しかし、四十六年新人戦から失つた全てのタイトルを奪取し、また二年間保持。だが、またしても該当学年選手不在のため、全てのタイトルを失うことになつた。このような経過から、表題になつた訳である。

そして、四十九年度新人戦から、またしても奪取にかかり、す

## ムダの積み重ねで栄光を

剣道部は、なぜ四時間も練習するのか。それは、"栄光"を掴むためである。栄光を掴むためとは言え、一日二十四時間のうちの四時間はムダではないのか？

政界や財界で名を成した人の自伝などを読むと、若い頃の道楽や放蕩の生活が語られていることが多い。また、優等生より落第生の方が、世に出てから成功している例もある。道楽の果てに大人物ができ、落第生が出世する。なぜだろうか。隠された本人の資質もあるだろうが、しかし、その時のムダが後年になつて生きてくるのだと思う。他人が避けることに手を出すムダ、一年余計に学生生活を送るムダ……。一見ムダに見えるが、長い目で見た場合、決してムダではないのじやないだろうか。人間形成の面で、まともに生きた人より（全てとは言えないが）大いにプラスになるような気がする。

最近の若い人们は、あらゆる面でムダをしなくなつたと言われる。「勉強のマイナスになる」とスポーツを敬遠する高校生、等々。一体利口なのか、バカなのか。話がちょっと横道にそれたが、世の中で何がムダかといつて、スポーツの練習ほどムダなものはないと思う。なかでも剣道の練習は、その最たるものではないだろうか。一試合四分、しかし、二本先取すれば勝ち。場合によつては、二十秒もかからないで一試合が終わる時もある。インター・ハイで優勝するのに、いくらやつても六試合、計二十四分。十二本（十二回相手をたたく）取るだけなのに、あの練習。これじゃないか。

題が書けるでしようか。決して書けないです。

つまり、スポーツも勉強も、その場の試合や試験でいくら良い成績を納めようと思つても、毎日毎日ムダをしていなければ、ムダを積み重ねておかなければ、良い結果は得られないのである。

これで先の疑問に答えが出たのではないだろうか。寒高生諸君！人生の"栄光"を掴むために、剣道部と共にムダを積み重ねようじゃないか。

ほどのムダが世の中にあるだろうか。しかし、剣道も人生と変わりなく、うんとムダをした者、ムダを積み重ねてきた者が最後には勝つのだ。

スポーツ新聞などを見ると、巨人の長嶋や王は、ちょっとスランプになつたら、必ず多摩川（巨人の練習グラウンド）に現れるそうだ。普段から人の倍ほどムダな動きをしているくせに、そのうえまたムダなことをしている。「ONは練習が好きなんだ。根っこからの野球人なんだ。」と、皆は思うかもしれない。しかし、決してそうではないのだ。一昨年の日本シリーズで優勝が決定した瞬間、優勝の喜びを聞かれた王が、「やつたあー、これで当分練習しないですむぞ。」と答えたそうだ。練習が好きな人間の言う言葉では到底ないはずだ。そして、「僕たって練習はイヤですよ。練習しないで打てるような方法や薬があつたら何千万円出しても買います。練習なんて考えてみればムダですよ。でも、そのムダをしなかつたら、たつた一本のヒットも打てはしない。打ちたい。勝ちたい。だから練習する。ムダなこと、辛いことをしないヤツに負ける訳がないと思ってやつてますよ。」と付け加えたそうだ。そこで、大学受験を考えてみてもそうではないだろうか。数学の問題は、普通十問から十五問であります。それでは公式にあてはめて十問から十五問、問題が解ければ合格するでしょうか。決してそうではないはずです。英語も然り。英単語を八千語覚えておけば大学受験はOKだそうです。入試問題に使われる単語は千語くらいでしょう。だからと言って、八千語中、千語知つておけば間